

松本修著『文学の読みと交流のナラトロジー』

(2006年7月20日刊 東洋館出版社 B5判 154頁)

山 元 隆 春

ナラトロジー (narratology; 物語論) は、20世紀の文学理論のなかで、大きな位置を占めるものである。ジェラルド・プリンス (遠藤健一著) 『物語論辞典』 (松柏社 1997年) やパトリック・オニール (遠藤健一・高橋了治訳 『言説のフィクション—ポスト・モダンのナラトロジー—』 (松柏社 2001年) などによって、その系譜や重要な事項を知ることができる。遠くプロップの『昔話の形態学』 (北岡誠司・福田美智代訳 書肆風の薔薇 1987年) に始まり、バルトやジュネットによって大成された、とみるのが一般的であるが、「物語」の読みを理論化していこうとする欲望はそれだけにとどまらない。狭い範囲の「物語」にとどまらず、説話や映画、その他のさまざまな文化事象を解明する学として、人文科学の多くの分野で活用されていると言ってよい。

松本修氏の『文学の読みと交流のナラトロジー』も、そうした「ナラトロジー」の一つに数えることができる。ナラトロジーの展開において蓄えられてきた知見を、国語教育学研究のなかに確かなかたちで位置づけた労作として評価することができる。松本氏は本学会の創立50周年記念事業の一環として刊行された『国語科教育学研究の成果と展望』 (明治図書 2002) のなかで「ナラトロジーと国語教育学研究」 (その内容が、本書の第2章「研究領域および研究方法としてのナラトロジー」にあたる) の項目を担当した。国語教育学においてはこの領域における第一人者であると言ってよい。

日本文学のテキストを素材とした多くのナラトロジー研究書に比して、松本氏の著作の特徴は、物語論 (ナラトロジー) の研究成果を、国語教育のなかのさまざまな「語り」に生かしていこうとしたところにある。「読むという物語」を探究した書であるが、同時に、国語科授業の社会的理論としての意味も持っている。

授業研究というかたちで展開されてきた、授業の「読み」の研究は、日本の教育学を特徴づけるひとつであると言ってよいが、本書はその領域に「ナラトロジー」の知見を生かして一石を投じた。

本書の構成は次の通りである (紙幅の都合で章節のレベルまで提示する)。

はじめに

序章 研究の目的と研究の方法

第1節 研究の目的

第2節 研究の方法

第1章 文学の読みとその交流の実践的意義

第1節 文学教育をめぐる状況と問題の所在

第2節 世間話の持つ癒しの力

第3節 意味づける行為

第4節 伝える行為

第5節 文学教育の目標

第2章 研究領域および研究方法としてのナラトロジー

第1節 ナラトロジーの射程

第2節 ナラトロジーの導入

第3節 ナラトロジーの導入における問題点

第4節 語りの分析の方法

第5節 語りの分析の枠組み

第6節 ナラトロジーによる教材分析の具体的方法

第7節 学習活動への展開

第8節 教育研究への展開

第3章 教材分析におけるナラトロジー

第1節 「山月記」の教材分析

—「語り手」の把握をめぐる問題—

第2節 「ごんぎつね」の教材分析

—語りの分析と描出表現—

第3節 「走れメロス」の語り

—語りの分析と読み手—

第4章 「語り」にかかわる読みを契機とした読みの交流の様相

第1節 読みの交流の理論的モデル

第2節 読みの交流を認定する枠組み

第3節 読みの交流における話題と話し合いの様相

第4節 「語り」に焦点化した読みの交流活動

第5章 「語り」にかかわる読みの交流の展開

第1節 状況の文脈を「資源」とした読みとその交流の可能性

第2節 読みにおける状況の文脈の導入と語り
の構造

第6章 研究の成果と今後の課題

第1節 研究の成果

第2節 今後の課題

おわりに

本書における松本氏の問題の所在は、第1章第5節「文学教育の目標」に次のように記されている。「文学の読みとその交流は、名付けがたいものへの名付けという意味での創造行為であり、関係の中に自己を紡ぎだしていくという意味での創造行為でもある。この二つの創造行為は、認識と認識主体とをともに鍛えるという教育的目標のもとに文学の教材としての位置づけと、それを読み、その読みを交流する学習を擁護するものであり、優れた文学作品が安定的な教材として存在することの必然性を擁護するものであろう。文学を読むこと、その読みを交流させること、この二つの活動を推進することそのものが、文学教育の目標である。」(本書19-20頁)

松本氏がここに言う「二つの創造行為」とは「名付けがたいものへの名付けという意味での創造行為」と「関係の中に自己を紡ぎだしていくという意味での創造行為」である。本書のタイトルに使われている言葉を用いて言えば、前者は「読み」にあたり、後者は「交流」にあたると言えるだろう。重要なのは、この二つの行為が分かちがたく結んでいると松本氏が捉えていることであり、いずれかに偏しても「文学教育」はまっとうされないと氏が考えていることである。この二つの行為について徹底的に考え抜くことが「文学教育」に関する「本質論的検討」であり、その姿勢が本書を一貫している。そしてその「検討」こそ、教育の「今日的状况」を打破するのだという思いが本書を魅力あるものになっている。

このような問題意識にもとづきながら、本書のめざすところを松本氏は次のように言う。

「本研究は、こうした文学教育の目標に方法的に対応するための理論的枠組みとしてのナラトロジー *narratology* の意義を認める立場から、文学教育における文学教材の教材研究におけるナラトロジーの導入と展開、そして学習過程における読みの交流の組織とそうした学習過程の分析検討におけるナラトロジーの導入と展開の可能性をともに検討しようとす

るものであるが、同時に、文学教育の実践的意義に関する本質的な議論に応えるものとしてのナラトロジーの価値を検討することにもなる。」(本書20頁)

本書のタイトルに用いられている「ナラトロジー」は、松本氏の「理論的枠組み」を提供するものである。先に書かれていた二つの「創造行為」に「ナラトロジー」の枠組みから取り組んでいくことによって、今日の「文学教育」の問題に働きかけることができるだろうという強い思いをここに読み取ることができる。そして、上の引用文の最後の部分に書かれているように、本書では「ナラトロジー」の理論としての有効射程をはかることも目的とされている。

このような問題意識に立って、本書では「ナラトロジー」を理論的枠組みとした「文学教育」の「本質論的検討」が繰り広げられていく。

第2章では「ナラトロジー」導入の可能性と問題点が探られている。先行研究を広く渉猟し、「ナラトロジー」が何であるのか、それが何のために有効なのかということ掘り下げていく手続きは確かなものである。もちろん、「ナラトロジー」が万能薬ではないことは、松本氏自身がよく承知している。たとえば、第3節「ナラトロジーの導入における問題点」には「語りの分析には読者の読みが関与するため、ある程度の相対性がつきまとうこと、しかし分析者もまた自分の読みを相対課しにくいこと」がその「問題点」として的確に指摘されている(本書27頁)。そのような「問題点」を自覚しながら検討を進めることで、「ナラトロジー」導入が従来の「視点論」等の理論的枠組みを乗り越えるものになるのではないかという期待が示されている。

松本氏による「教材分析の具体的方法」は本書第2章第3節に、杉みき子「虹のみえる橋」や太宰治「走れメロス」の一節を用いてきわめて具体的に示されている。そこでは、文章の構造と表現を捉えていく手続きが明瞭に示されている。それは文章の「かたち」を捉えていくための入口を示したものとみてよい。それが「教材分析と学習過程構築」の足場になると松本氏は言う(本書40頁)。

松本氏は「ナラトロジー」を、野家啓一の言葉を借りて「経験の解釈装置としての教育研究を本質的に体現するトポス」だとする。ここに「ナラトロジー」導入にあたっての松本氏の立場が明瞭に示されていると考えることができるだろう。すなわち、「物語」そのものが「いま・ここ」から過去を再解

釈する営みの上に成り立つものであり、「ナラトロジー」を援用していくことは、教材（学習材）としての物語文を、そのような「経験の解釈装置」とみなすことになる。そのような「装置」が呼びかけるものをできるかぎり注意深く読み解いていくことは、授業者にとっても学習者にとっても、その物語文を素材とした「学び」を展開していく基盤となる。その物語を物語った者によって営まれた再解釈を解釈していく絶え間ない営みを「ナラトロジー」は解き明かす、と松本氏は言うのである。

こうして第3章「教材分析におけるナラトロジー」へと読者である私たちも進んでいくことができるのだ。この第3章では、「山月記」「ごんぎつね」「走れメロス」という、わが国の国語教科書で長く用いられてきた教材を対象とした検討が営まれている。

「語り」「語り手」「語り手と読者」それぞれの把握、「描出表現」の働き、物語の部分と全体との関係の把握、といった問題を窓とした具体的考証がそこでは展開されていく。いずれも、物語と小説を教材とした授業を営んでいく場合に「教材分析」として注意を払う必要のある問題がこまやかに論じられている。文字通り授業づくりの「足場」を確かめる思いで、このくだりを私たちは読み進めることになる。

松本氏の言う二つの「創造行為」のうち後者の「関係の中に自己を紡ぎだしていくという意味での創造行為」の検討が営まれるのは、本書の第4章以降であり、本書のオリジナリティを高めているのもこの部分である。ここでは、「読みの交流」の「ナラトロジー」が探究されていく。管見に及ぶ限り、読みの社会性に関して「ナラトロジー」を適用した研究は、それほど多くはない。

松本氏の論は社会言語学者たちの「物語」研究が示した問題と重なりあうものである。たとえば、もはや古典的なものと言ってよいと思われるが、社会言語学者リヴィア・ポラニーには、アメリカ人の日常会話中の物語（会話的物語）に関する研究がある（Polanyi, Livia. (1985) *Telling the American Story: A Structural and Cultural Analysis of Conversational Storytelling*, Ablex.）。ポラニーにとって物語（a story）とは「描かれた出来事や状態についてなにごとか、またはそれに起因するなにごとかを説明するために、過去の経験を言語的にコード化したもの」（Polanyi, 1979, p. 208）であった。

少し横道にそれたが、松本氏の「読みの交流」論

において展開されている議論はこうした「社会的物語」の「ナラトロジー」の系譜に属するものであると考えることができるだろう。松本氏が本書で展開する「読みの交流の理論的モデル」（本書68-70頁）の、とりわけ「メタ認知的変容」に関する記述は、ポラニーやアダンらの言う「価値づけ構造」や「要点」や「意図」に関わるものであり、物語の「読み」における「他者への方位決定」を基礎づけるものであると言ってよいだろう。「トロッコ」や「走れメロス」の読みと解釈に関する発話プロトコルのゆたかでこまやかな分析は、「読みの交流」における「読みの乗り換え」が起こる過程を支える条件を探り出すために行われた。そしてそこでは、語り手の「価値づけ」に関する読者間の言葉のやりとりが分析されていく。多くのナラトロジー研究書と明確に異なる本書の魅力はこのところにある。

松本氏は本書の序章でマルティン・ハイデガーの「世間話」をめぐる「世間話は現存在に、おのれの世界、ほかの人びと、そしておのれ自身への了解的存在を開示する。」という言葉を引き論を進めている。その「世間話」とは「物語」のネットワークだとも松本氏は言う。この考え方は、本書を一貫したものだと思う。「物語」と人間がどのような意味でかかわるのか、ひとびとのどのような心のありようを映し出す鏡なのか、そのような問いを本書の読者はふと問うてみたくなるだろう。本書はまさしく、物語るひとびととひとびとの物語に関して、国語教育学的に論及したものである。そして、その物語の構築に際してどのような「資源」が生かされるのかということの解明も図られている。意味を生み出す物語の仕掛けとはどのようなものか、各々の読者はどのように意味を経験していくのか、個人内で経験される意味は個人間で生成される意味とどのようにかかわるのか、といった「文学教育」を基礎づける問いに向かうための理論的枠組みが築かれていく動的なプロセスを多くの読者がそこに見るだろう。

もちろん、松本氏自身も本書第6章で指摘するように、「読みの交流」を支える条件を探り出す営みは容易ではなく、さらなる考証の積み重ねが必要となるだろう（現に本書刊行以降も松本氏はそれを営んでいる）。しかし、この領域に「ナラトロジー」の視角から一つの確かな足場を築いたという点で、本書は重い価値を持つ。（広島大学）

国語科教育

第六十五集

〈目次〉

I 研究論文

- 小・中学生における聞き取り能力の実際と指導上の課題
——「並列的複数情報の関係づけを支える心的作業」について—— 若木常佳 3
- 国語教育における新たな学習者研究の構築
——個へのまなざしの必要性—— 原田大介 11
- 国語教科書に埋め込まれた日本文化
——「雪・月・花」と季節感—— 西一夫・藤森裕治 19
- 転用される「国語表現」——高等学校国語科に
「話すこと・聞くこと」指導が根付かない理由—— 笠原美保子 27
- カナダの国語科におけるメディアリテラシー教育の発祥（1950～80年代）
——カナダ社会の「アイデンティティ形成思想」と
メディア概念の変容—— 近藤 聡 35
- 中学校教授要目改正（1931（昭和6）年）における教科内容決定の背景
——「現代文」の定着に伴う「古文」概念の形成—— 八木雄一郎 43
- 児童生徒の読むことの困難感の形式的・内容的変化に関する研究
「敦盛最期」教材論——忘却される首実検と無視される語り収め—— 田中耕司 51
菊野雅之（右1）

II 実践論文

- 読みの方略が転移する可能性 ——作品を解釈する
仮定スキルが他の読みの場面で活用される条件—— 佐藤佐敏 59
- 学習者が「初読の読者」として意欲的に小説学習に取り組む方法の研究
——結末を省略したテキストを用いた『こゝろ』の指導を通して—— 吉田茂樹 67

III 書評

- 桑原哲朗著『芦田恵之助の綴り方教師修養論に関する研究』（溪水社刊） 村井万里子 83
- 河野順子著『〈対話〉による説明的文章の学習指導
——メタ認知の内面化の理論提案を中心に——』（風間書房刊） 寺井正憲 86
- 松本 修著『文学の読みと交流のナラトロジー』（東洋館出版社刊） 山元隆春 89
- 難波博孝著『母語教育という思想
——国語科解体／再構築に向けて——』（世界思想社刊） 府川源一郎 92

IV 研究論文・実践論文の英文要旨

95

V 学会事業報告

100

編集後記・編集委員

付録—学会役員一覧，学会会則，『国語科教育』編集規定・

編集委員会規定・投稿要領，「書評」についての申し合わせ

入会案内